無忌島
埔田善衛

鬼無鬼島

新潮社版

鬼無鬼島（きぶきじま）

昭和三十二年三月二十一日印刷
昭和三十二年三月二十五日發行

定價 貳百七拾圓
地方賣價 貳百八拾圓

著者 堀田善衛

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社 新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京(34)代表〔七一一一(九)〕〔六一一〇一(五)〕
振替 東京八〇八番

（亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。）

印刷・扶桑印刷株式會社　製本・神田 加藤製本所
© By Y. Hotta Printed in Japan

鬼無鬼島

裴

幀

宇

田

裕

彦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一章

上ノ岬は、別の名を神ノ岬といつた。その名のように、この岬は、傳說あるいは神話の靉靆たる雲を、かねてたなびかせていた。上ノ岬は九州薩摩半島の南端に位置し、親指のかたちに反りかえつて泡立つ海に乘り出し、その指の腹の部分は東支那海にのぞみ、背は太平洋に面している。指ひとつで廣い海を二つにわけているのである。

上ノ岬にあたる親指だけをのこして、あとの四指を曲げ、握りこぶしをつくつてみる。こぶしの頂點にあたるところには、上ノ嶽、あるいは神ノ嶽と呼ばれる標高六百米ほどの、かなりに險しい岩山がそびえている。大むかしから、この上ノ嶽は薩摩近邊の海を航してゆく人々にとつては、海門嶽、それに櫻島の噴煙とともに缺くことの出來ぬ目當であつた。

邇邇藝ノ命天降りの一節に、「此地ハ韓國ニ向ヒ朝日ノ直刺ス、夕日ノ日照ル國ナリ。カレ此地ゾイト吉キ地」と詔りたまひて、底つ石根に宮柱太しり、高天の原に氷椽高しり

てましまし、というくだりがある。

村の古老たちは、春秋の彼岸の夜半に、この上ノ嶽の八合目にある上ノ嶽神社のあたりから、にぎやかな笛太鼓の音が聞えて來、樂の音は次第に山を下つて、太平洋側の岸にある、村の天草採り場になつている神渡（カムワタリ）の、寂しく荒涼とした岩場へと消えて行くのを、幾度も耳にしたという。

神渡は、果しない蒼瀛の彼方からやつて來た太古の神々が、太古の日本に上陸したその地點である。そして神渡（カムワタリ）の裏側、すなわち東支那海に面する、狹い岬で唯一の平坦地に、上ノ池村があつた。

村の古老たちは、彼岸の夜が更けてゆくと、燒酎をのみかわしながら、短く激しいアクセントのことばで語りあいながらも、ふいと思い出したように耳を澄まして、上ノ嶽から下りて來る樂の音をとらえようとする。

部落の背後、立神（タツカミ）、鵜ノ瀨（ウセ）などの海中に屹立した岩や瀨（暗礁）の多い太平洋側は、いつも潮騷というよりも、もつと荒々しい波の音が、小さな部落を怯かすように立騷いでいた。波は、海底から、一抱えも二抱えもある巨石を無數に抱きあげて、きり立つた斷崖にぶつつける。波靜かなときには、この海は小石と小石とが相打つて、響きある音を聞かせ、

荒天のときには、重い、ずつしりとした中味のある海鳴りの音を轟かせた。

これに反して、上ノ池部落の前面は、音一つせぬ入江、というよりは、その名のように、かねて靜まりかえり、波ひとつ立たぬ優しい池であつた。池から東支那海への出口は、わずかに十米ほどの幅しかなく、なかに入つて最大幅員五百米ばかりの鹽辛い池が、發動機船や鰹や鰤の定置網用のダルマ船や、また一本釣り用の小舟などを浮べていた。漁師たちは、心から安心してこの池に船をあずけていた。どんなに荒れても、たとえこのあたりにとつては毎年訪れる兇猛な客である颱風が襲つて來ても、船が流されることなどはなかつたからである。

潮の加減によつて時間は違うけれども、春から夏にかけてならば午後四時頃から　船は燒玉エンジンの音高く、つぎつぎに歸つて來る。人々は、その音によつて、どこそこの、誰々の船が歸つて來た、と知る。そして漁業組合の水揚げ場近くに迎いに出る。あるいは、魚の分前にあずかりに、出る。

船は、部落の裏面にあたる太平洋側から、また正面の東支那海側から――海に出れば太平洋も東支那海もあつたものではなく、ただ潮工合、風模樣だけが問題なのだが――いずれも上ノ嶽を目當にして戻つて來る。彼等は、上ノ池港から發動機船で四時間航程のとこ

ろにある鬼無鬼島や、ときにはもつと南方の、硫黄島、黑島、竹島などの上三島といわれる島々や、また種子島、屋久島、口永良部島、あるいは無人島である鵜路島、草薙島のあたりまで漁をもとめて出掛けて行く。

彼等の大部分は、無電はもとより、ラジオも何ももつていない。漁師たちが唐針と稱している、ローマ字と十二支の兩樣でしるされた羅針盤をもつているだけである。だから、彼等にとつて上ノ嶽が見えて來さえすれば、それは、安心して眠ることの出來るわが家を心に想い描くことと同一であつた。

ところで、上ノ岬全體は、日本古來の神話傳說の被衣をかぶつてはいたが、上ノ嶽神社の御神體、航海安全の神は、實は日本の神ではなかつた。あるいはこれは、日本の神だけではなかつた、といつた方が安全なのかもしれない。というのは、「此地ハ韓國ニ向ヒ」とあるように、韓國は朝鮮だけをさすものではもとよりなく、また唐のみを意味するものでもない。カラクニとは、要するに外國ということなのであろう。

社には、邇邇藝ノ命、木花咲耶姫の二神のほかに、媽祖神、別の名は娘媽神女なるものがまつつてあつた。

この媽祖神、別稱娘媽神女というのは、唐土福建省からの渡來神であつた。宮の由來に

は次のようにしるしてある。

往古唐土福建ノ南海ニ甫田トイフ所アリ、此浦ノ漁家ニ林氏ノ娘生レテ靈異アリ、十餘歳ニシテ、我レハ是海神ノ化身ナリ、海洋ニ入リテ往來ノ船ヲ守護スベシトテ忽海水ニ沒死ス。則甫田ニ廟社ヲ建テ船神ト是ヲ崇祭リテ今ニアリ。時ニ文明ノ天子、依天妃媽ノ謚號ヲ賜リ則觀世音菩薩ノ化身トシテ唐土ノ諸船甚尊敬ス。其海洋ニ沒セシ尊骸ハ流レテ此山ノ海邊ニ寄來レルヲ取上ゲ則山上ニ葬奉リヌ、其後種々靈異ノ事アリ。往來ノ船ノ諸願ヲ叶ヘ給ヘリ。是人ノ知ル所ナリ。因ニ長崎往來ノ唐船モ、洋中ニテ初テ此青山ヲ見レバ紙錢ヲ燒キ、金鼓ヲ鳴ラシテ拜祭ス。

すなわち、媽祖神、別名娘媽神女は、中國の海神であつた。わが日本の神々と中國の海神とが、長きにわたつて仲良く同居し、素直な人々によつて手篤くまつられあがめられて來たのであつた。

そのことをはじめて知つたとき、眞野友則も、また彼の內緣の妻である大內早子も、異常な衝擊をうけた。この二人の若者、友則、二十七歳、早子、二十五歳の二人は、いわばそのために、信仰にかかわることから、上ノ池から發動機船で航程四時間のところに泛ぶ、鬼無鬼島から逃れるようにして出て來たのであつた。

鬼無鬼島は、上鬼無鬼、中鬼無鬼、下鬼無鬼の三つの島からなる、貧しい離れ島であつた。産物といつても、極めて少量の米と麥、それに唐芋と稱される薩摩芋と、鹿子百合の百合根と、あとはこの地方でカタシ油と呼ぶ椿からとる油くらいしかなく、それらすべてをあわせても島民は到底自給出來なかつた。しかも漁業のほとんどは、島の人々の言う地方、すなわち本土の漁業家によつて占められていた。海岸線の九割九分は、五十米から三百米ほどの高さに及ぶ斷崖であつた。そして島には、四百米から六百米ほどの火山系の山山がいくつもかさなり合つていた。だから島には道路らしい道路はなかつた。道はすべて崎嶇とした山道で、岩と松の根や太い竹の根が歩一歩にとび出していて、自轉車なども何の役にも立たなかつた。島には汽車電車はもとより、近年まで自動車もなかつた。近年まで、というのは、敗戰直後に對岸の上ノ岬に設けられた米軍の無線基地と相呼應するように、下鬼無鬼島のいちばん高い山頂に大きなレーダー基地が建設され、唐ン浦という小さい漁港から山頂まで、大規模な專用道路が建設された、そのとき以來、そこだけにはトラックやジープが見られるようになつたからである。

けれども、島自體には、依然として、船を除くほかには、何の交通機關もなかつた。奄美大島や沖縄などの遠くはなれた島々とはちがつて、地方（本土）に近いだけに、それだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けに忘れられていたのかもしれない。この島には、砂糖も採れなかつた。かつて珊瑚が採れたことがあつた。が、これは採りつくしてしまえば、次に採るまでには、何世代もあいだをおかねばならない。

この島の道を行く地方(じかた)の人は、小半日も歩くと足の裏が痛んで來る。そしてどの部落へ行くにも、山中を小半日は、歩かねばならない。村落は、斷崖ばかりの海岸線の、わずかな裂け目に出來た砂濱の、その小脇を流れる川を少し溯つた山あいに二十戸か三十戸、あるいは四十戸から五十戸ほど、ひつそりとかたまつていた。濱そのものに近く住むことは、どれほど望ましくても、それは、出來なかつた。晩夏から秋、冬にかけて吹く烈風は砂礫を捲き上げて周圍の岩山に打ちあたり、打ちあたつた風が吹き返して來るときに生ずる一種の眞空狀態のようなもののなかに入つた家々は、極めて容易に倒潰した。

自然が惠んでくれたものは、南洋系の、珊瑚礁などによく見るどこまでも澄明な海と、椿と、七月に入つてから、ほとんど全島全山を蔽つて咲く鹿子百合であつた。しかも秋から冬にかけて海が荒れれば、毎年、一度ならず二度三度、人々は饑えた。すぐる太平洋戰爭中、及びその直後、島の人々は、眞實、飢えた。

第二章

昭和二十四年春、二十七歳の友則と、早子、二十五歳の二人は、島を逃れ出た。

そのときまで、二人は地方(じかた)といえば長崎しか知らなかつた。戰爭中に二人とも工場へ働きに出ていたのである。友則は、軍工廠にいたので兵役をまぬがれた。長崎では、相會う機會はほとんどなかつた。原子爆彈で工場が破壞されて後に、二人は別々に便船を得て村へ歸つて來た。

昭和二十年初秋、二十三歳の眞野友則は無慙に燒けただれた長崎から海路天草へ渡り、天草からまた便船を得て肥後水俣へ、水俣から陸路串木野を經て上ノ池へ出て、そこから太平次の船で島へわたしてもらい、唐ン浦で一泊し、彼の村である波留(ハル)ノ浦へ、再び太平次の厄介になり、島をほとんど半周して、歸つた。

船が島をめぐつているあいだ、友則はときどきホロバシリと稱する漁を手傳いながら、あかずにわが生れ故郷である島のすがたかたちを眺めつづけた。鋭く勁い視線をもつたこ

の若者は、食い入るように、縦の條痕をあらわに見せてそのまま海に突き入つている眞黑な斷崖や、そのすぐ横に、朱に近い褐色と白味のかつた鉛色の横の層が交替交替に長く層層とかさなつたまま海に沈み、打ちかかつて來る重い波に堪えているすがたを、凝つと見詰めていた。

「ほい、魚がかかおッど。お前さあ、どこ見とる」

と、太平次に呶鳴られてはじめて艫から海中におろして引き走つている絲の、その根もとに、バネ代りにつけたゴムがぴんと張つているのに氣附いた。ホロバシリは曳繩の一種で、擬似餌に鷄の保呂羽、すなわち翼の下毛を使うところから發した名であつた。

絲をたぐつて行くと、船尾二十米ほどのところで一米半ほどの鰐が、練り込んだ群青の上に弓なりに跳ね上つた。次第にひきよせられて來る鰐の黄味を帶びた腹は青黑い水とくつきりした對照をなしていた。

鰐が釣れた後、しばらく魚はかからなかつた。友則は次々と眼前に出て來る岬樣の嶮しい切り立つた岩塊を眺め、そのところどころに岩石の層通りに、あるいは四角、あるいは菱形の入口を見せている、暗い海の洞窟を凝視したりしていた。

友則と早子の育つた部落は、一括して波留ノ浦と言われていたが、友則のそれは濱邊か

ら細い、幅十米ほどの入江――それは「川」と呼ばれていた。滿潮時には入江であり、干潮時には川にすぎぬ入江を二里ほども溯つたところにあつて「山」部落と呼ばれ、早子のそれはこの入江の入口にあたる狹い濱邊に近い山かげにあり、それは「濱」部落と呼ばれていた。「山」の部落は戸數三十戸くらいであり、「濱」には二十戸ほどしかなかつた。そして「山」の者は、ほとんどまつたく漁には出なかつた。從つて、「濱」部落には、いま友則が憑かれた人のように見詰めている海の洞窟に關する言い傳えが澤山にあつたが、「山」部落には、海に關するはなしは、まつたくなかつた。「濱」部落では、海の洞窟に入ると、あの世で織る機の音や鷄の鳴き聲が聞えて來るとか、後世極樂の地は岩屋の奥、約一里のところにあるとかと語りつがれていた。

山部落には、しかし、海に關するそれはもとより、山についてのものもなかつた。しかもないについては、それだけの理由があつた。

友則が、洞窟を眺めて考え込んでいることも、その理由について、であつた。

船が瀨の多い、從つて流れが早く不氣味な渦潮をなして海の深みから水がむくむくと盛り上つているところにさしかかつたとき、一度に五匹六匹、八匹九匹のハガツオや鰆がかかつて來た。

友則は、幼いときから海が、沖が好きだつたのだ。そしてそれだけでも、山部落では異常な眼差しで見られたのである。彼はおさな心に、山部落の人々は海を憎んでいるのか、と思うことがあつた。しかし、そのくせ、三月のあるきまつた日には、朝から部落をほとんどからにして濱へ出張つて行き、海邊の狹い濱で飲食をし、老人たちは、友則にはどうしても覺えられぬ、しかも日本語とはとても思えぬことばと、單調な異國風な旋律をもつたうたのようなものをうたう。また、死者があつた場合には、靈前に生魚をそなえる……。それもなるべく巨きなものを。

まだ幼いころから友則は、イオグルイ、すなわち魚狂いとか、トモノリオキエッテモシヨロ、すなわち、友則、沖へ行き申し候、とかと呼ばれていた。

これに反して、早子の育つた濱部落二十戸は、耕作にはあまり熱心ではなく、もつぱら波留ノ浦の入口に近いところに仕掛けた定置網と一本釣りの小舟とに頼つて生計をたてていた。その網も荒波に屢々破られたが、とにもかくにも、網元一軒が頼りの網であり、早子らの網子の娘や妻たちは、牛か豚の世話をしていた。

山と濱とは、物々交換的な關係をもつていた。魚介類と農作物である。もとより絶對的には農作物は不足であり、到底自給は出來なかつたのであるが、山の三十戸と濱の二十戸

は、概ねつりあつた戸數なのであつた。濱部落の者は牛豚を飼つてはいたが、それを殺して食うということは滅多になかつた。畜生の肉の需要者は山にしかいなかつた。しかもそれを食うについては、山部落には、何か異常な、日本に固有なそれとは別の節日(せちにち)のようなものがあるらしかつた。小中學校は、山にあつた。二つとも、地方(じかた)側に面した唐ン浦にあるそれの分校であつた。兒童たちは、山も濱もいつしよに机を竝べた。が、それはそれだけのことで、それ以上の關係は何もなかつた。

山の者は山の者としか結婚せず、濱の者は——これはどこの誰と結婚しようと、概ね、自由であつた。しかし山の者は、他所(よそ)者と結婚したならば、部落へ戻ることは出來なかつた。濱の者と山の者が縁組みをして、濱に住むことは出來ても山へ戻ることは出來なかつた。古老たちの記憶する限り、山のこの掟は守られ、うちつづいた近親結婚の怖るべき結果は、山部落へ入つたことのある人の目をのがれることはなかつた。

山部落の者は、濱の人々を、アシガル奴、とさげすみ、濱部落の者は山の人々を、あいつらはクロじやけん、と一目おいていた。

濱の漁師たちは、それぞれにむずかしい名前をもつていた。たとえば江夏伊昭とか鬼丸彦法とか早子の父の勝基とかという、おそろしく四角ばつた名であつた。そして山の人た

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com